

魚河岸ものがたり

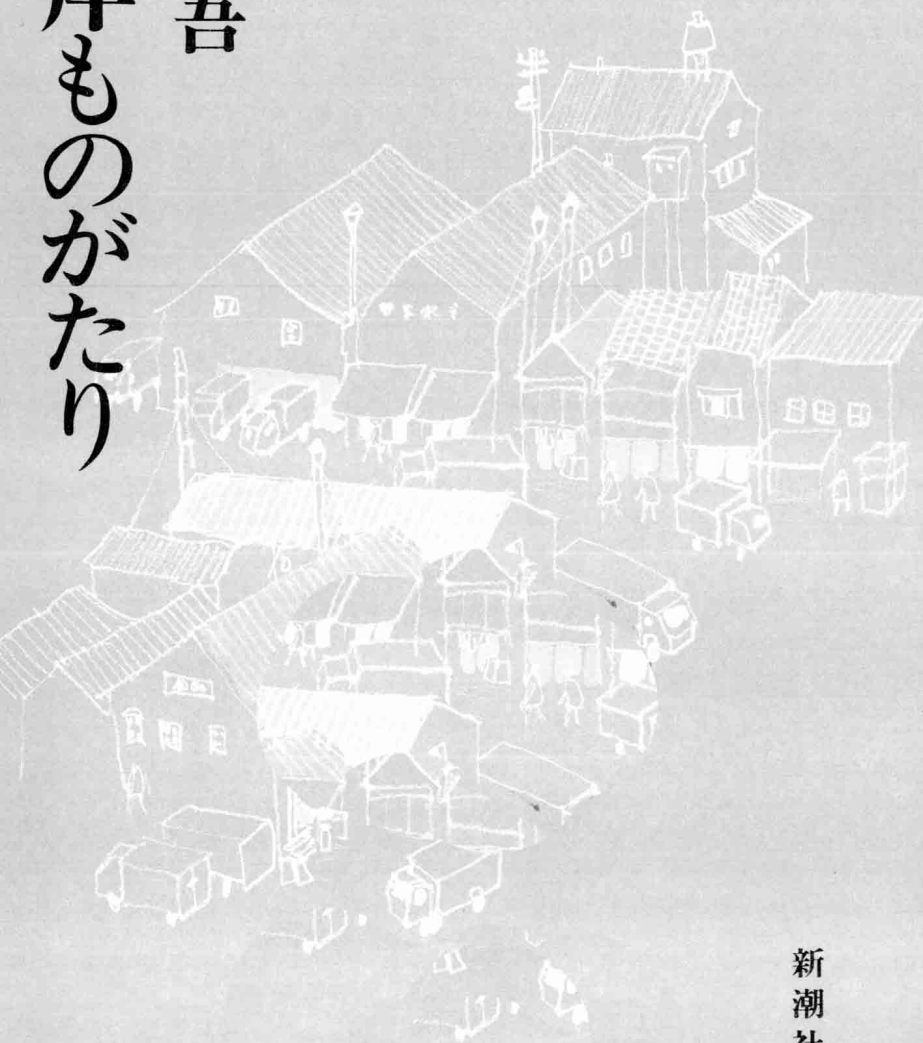
森田誠吾

新潮社



森田誠吾

魚河岸ものがたり



新潮社版

魚^う河^が岸^しものがたり 定価二二〇〇円

昭和六十年九月二十五日 発行
昭和六十一年二月二十五日 七刷

著者 森^{もり}田^た誠^{まこと}吾^ご
発行者 佐藤^{さとう}亮^{りやう}一

発行所 株式会社 新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京(五五)五一一一(業務)
東京(五五)五四一一(編集)
振替 東京四八〇八千一六二
印刷 株式会社 光 邦
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

■■■■■■■■■■ © Seigo Morita Printed in Japan. 1985 ■■■■■■■■■■

ISBN4-10-338702-5 C0093

魚河岸ものがたり・目次

4	3	2	1
波 除 神 社	築 地 川 支 流	門 跡 橋	市 場 通 り
86	51	33	7

8
隅
田
河
口

260

7
晴
海
通
り

239

6
勝
関
橋

182

5
海
幸
橋

150

魚河岸ものがたり

1 市場通り

吾妻健作が、はじめてこのまちに入つたのは、もうひとむかしから前のことになる。
はたちも半ばを過ぎていた。
颯風のなごりがまちを吹きぬけて、コバルトの空に塵屑が舞い、通りにはからのボール箱が飛びはねていたのを憶えている。

ひとつの秘密に追われていた。

「そこを、曲がつて行きましょう」

和服の恭子が裾をおさえ、風を避けて狭い横町に健作をさそつたが、なお露地の植木は、しきりに葉裏をひるがえしていた。

日曜の昼さがりとはいえ、店という店は戸をおろし、影となつて軒下を走る猫のほかは、人を見えない汚れたまちであつた。

「お母さん、誰もいませんね」

「きょうはね」

「きょうは？」

「ええ、あしたはいっぱい」

横町を抜けてふたたび通りに出ると、風が鳴り、恭子が押しもどされて健作に支えられた。

「見えるでしょ、あそこに」

恭子の指さす看板の群の中に、『鯉節問屋・吾妻商店』とカッチリ彫られた文字が読めた。

その店のくぐり戸の前には、小柄な老人が風に晒されて人待ち顔に立っていたが、二人を見とめると小走りに近づいて、恭子の荷物に手をかけた。

「お待ちしておりました、奥様」

風の合い間に、丁重な物言いが聞きたれた。

それから健作の方におだやかな視線を向けると、ゆっくり頭をさげた。

「関根でございます。若旦那には、さぞ……」

老人の言葉の続きが、吹き返す風の中に飛び千切れて行った。

誰もが、かしと呼ぶこのまちは、湾岸に開いた隅田河口にあった。

東と北を、切れ目なく車輛の流れる大通りにさえぎられ、西と南を、河とその支流が阻む。

さらに、この四角な区域は、小さな鉄の橋をかすがいにして、なかとそとの二つのまちに分かれていた。

風に耐えて、健作と恭子がたどりついた吾妻商店は、そとの町中にあった。

健作は、家にしみついたかつぶしの強い匂いに包まれ、拭きこまれて長い月日を見せるがっし

りした階段を昇り、店の三階に行きついた。

通りを見おろす北向きの八畳が寢室にあてられ、南の堀割りにのぞむ日当りの良い六畳には、すでに大ぶりの文机が据えてある。

「いかがでございますう」

窓外に目をやっている健作に、老人がのどかな声をかけた。

「僕には十分です」

「それはようござんした」

しかし、淀んだ堀割りの向う岸には、たてこんだ町並が、見苦しい裏側を遠慮なくむき出しにしている。

机に向つてみると、もはや風の音の届かぬ落ちついた二夕間ではあつたが、それは健作のために、恭子と老人が用意してくれた檻であつた。

次の日の明け方、かん高い水鳥の啼き声に、健作の夢が薄れた。

河口にあるこのまちを、過る水鳥は何だろう、あれがみやこ鳥か。

耳をすますと、啼き声は通りから聞えてくる。

そつと床をはなれた健作が、窓から暗い通りを見透かすと、水鳥の声と聞いたのは、向いの店の古びたシャッターのきしみ上がつてゆく音とわかつた。

そして、その音を合図のように、あちこちの店からもはだか灯がもれて、明暗の縞を作る通りに日除けが繰り出され、とりどりの品物がせり出してくる。

空しかったきのうのまちが、にわかに面変りをはじめたのだが、夜の白むとともに、まちは、

恭子の言つた通り雑踏のまちへと変身した。

かしは、巨大な都市の巨大な食欲を充たす市場である。

せり売りにはじまる大きな商いは、広いなかの受け持ちだが、狭いそとでの商いは、小ぶりでこまかい。

起きぬけから健作が見守ることになったそと、まちは、時とともに数をます人また人に埋まり、往き来も不自由な人ごみに変わったが、多種多様な品物を、より早くより多く売りさばく呼び声に湧き返った。

昼をすぎると、いつか人の波は引いて、まちは活気を失い、夕暮れには、きのうとおなじ空しいたたずまいに戻ったが、わずか一日の間に、このまちな見せた虚と実の激しい落差は、なにはともあれここに住もうときめた健作の心に、物憂いかげりを広げていた。

四月よつきというものを、健作は檻かぎという意識に耐えて送った。

風邪を引いて外出を禁じられた子供のよう、読書に疲れると二つだけの部屋を往き来して、そとの雑踏を見おろし、堀割りの上の雲に移りゆく季節を仰いだ。

あとは、二階において恭子の居間で食事をとり、関根老人をまじえて雑談の時を過すのが、わずかな憩いであつた。

恭子に代わつて店を取り仕切る、この律義な老人には、思いがけない酒脱しやだつな一面がうかがわれた。

「このまぢには何でもございます」という話の揚げ句に、

「駈け落ちまでございます」

と澄ました顔を見せて二人の笑いを誘い、まぢの恋人たちの折々の奇縁を語った。

また、要を得た商売物の談義も、味わいのある語り口で健作を楽しませた。

「鯉節と申しまして、山伏、目つぶし、一中節ではありませんで、まず鯉の身を水炊きしてなまり節、これを何度もしぶりまして荒節、荒いぶしでしょうか。

この荒節を日に当てましてから、樽に入れておきますとカビが出ます。カビを落としてまたカビを出す、これを繰り返しまして、本枯れ節が出来上るといふ寸法で。

身のおろし方によりまして、本節に亀節。本節は男節、女節と対になります。

出来ます季節によりまして、春節、秋節。

西の方から、薩摩節、土佐節、伊豆節、また房州ものは房熊と申しまして、いずれも海に近く、水清き所で作ります。

それから、魚によりまして、マグロ節、サバ節、サワラ節、イワシ節とございます。

一口に鯉節と申しますが、それは様々でございます」

老人の硬軟とりまぜた茶飲み話は、健作にとって外界をのぞく小窓でもあった。

健作が、みづから籠もった檻を開き、外界に出るようになったのも、その関根老人の思慮による。

「かれこれ四月になりましょう。御辛抱のよいのには感心致しますが、先行きのことを考えますと、おからだによくありません。

わたくしが考えますに、早朝、なかの方を歩きます分には、まず、お知り合いに逢う氣づかいは無いと存じます」

健作と恭子と関根老人の三人は、いつとも知れず、どこからとも知れぬ便りの届くのを心待ちにしていた。

その便りが届くまで健作は、人目を避けて過去を伏せていなければならない。

老人は、健作に場所を限つて夜明けの散歩をすすめ、恭子も不安気ながらうなずいた。

早春の朝まだき、健作は、恭子の見立てたジャンパーと、関根老人の支度した長靴に身をかため、航海の果ての船乗りのように、久しぶりの大地を踏みしめた。

そして、心から自由と呼びたい外気を吸いこんで、なかとそとを分ける小さな鉄の橋、青いペンキの海幸橋を渡つて行つた。

市場の中心は、煌々と灯をともし長大なアーケードである。

その下には、千二百軒からの仲おろしの店がぎつしり詰め合つて、盛りの時間には、五万を超える人を呑みこむ、とは関根老人の話にあつた。

健作はアーケードを目指したが、そこに達するためには、それぞれに荷を積んで、勝手氣ままに走り回る大小さまざまな車の流れを渡らねばならなかつた。

目を見張る思ひの健作は、大阪は堂島の米市場を描いた西鶴の一節に思い当たつた。

「山もさながら動きて、人馬に付け送れば、大道とどろき地雷のごとし」

今も昔も変わらぬ荒々しい市場の奔流に、健作は暫く立ちすくんでいたが、車の動きなど眼中に無く渡つて行く人々の何気ない表情に勇氣づけられ、人々の群れにまじつた。

アーケードの下は、荒磯であつた。

多彩な魚類が解体されて溝には鮮血が流れ、泡立つ生簀からは活き魚が水をはねかえし、路という路は濡れそびれている。

あわび、赤貝、ほたてなどの貝類は、電光に光つて磯の気を吐き、たこは山積みになり、いかは背だけをそろえて横たわり、かにはからみ合つて鋸屑の中にもぐつてゆく。

ここでは、やはりジャンパーと長靴が、健作のたのしい味方となつた。

その朝、健作は、なたでぶち切られ、のこぎりで挽かれ、長剣に似た大包丁で切りさかれるマグロを、目の前に見て圧倒された。

喧騒をはね返すアーケードをあとに、興奮と疲労を背負つて引きあげた健作に、関根老人は恐縮した。

「悪い日にお出しました。

この辺は、月ずえより月はな、曜日で申しますと、月曜日が一番に混み合います。

それを、よりによつて、おついたちの月曜という日にお出するなんて、全く氣の利かんことで」

「いえ、そんなことはありません」

健作は、恭子のいれてくれたコーヒーが、心のしこりを解いて、からだの芯にしみてゆくのを感じた。

「初めてのことでですから、疲れるのは当たり前です。それより、誰も彼も生き生きとして、実に勇壮な風景でした」

「そんなに？」

恭子は、吾妻商店の主人でありながら、一度もなかに足を向けていなかった。「ええ、それは大変なところです。お母さん、一度、一緒に行ってみましょう。

この国が、海の国だということが、つくづくわかります」

恭子は微笑するのみで答えなかったが、健作は、檻から放たれた高ぶりもあつて、見たままを語るに、恭子と老人が目を見かわすほど饒舌であつた。

その日を境に、降つても照つても、健作の夜明けの散歩が始まつた。

未明の市場が、まちに潜んで時を待つ健作の、ややもすれば沈んでゆく心に、生気を吹きこむ思いがあつたせいもある。

そして、闇に目のなれるように、なかの氣配に馴染んでゆき、ある朝、見事な硝子のケースにめぐり逢ふことになつた。

それは見事なケースであつた。

いや、ケースが見事だというのではなく、見事なのは、その中身であつた。

見上げるばかりのケースの中は五段に仕切られ、ガーゼに巻かれたマグロの輪切りが、光る断面を見る者に向けて並べてある。

最上段の右から、一キロ七千五百円を筆頭に、下段左の千三百円まで、三十通りに値をつけられたマグロが、きちんと間合いをとって標本のように陳列されていた。

これを下段から追つて行くと、ほぼ二百円きざみに上がつてゆくのだが、隣り合つて新鮮な色つやを見せている輪切りに、どうして二百円という値は、ばがあるのか、健作にははかりかねた。